

認識結果としての自己認識

小林 久泰

1 はじめに

仏教認識論の解明が進む中、仏教論理学派は、認識結果 (pramāṇaphala) として、経量部的立場からは対象理解 (arthādhigati/arthapratīti), もしくは対象認識 (arthasaṃvedana), と自己認識 (svasaṃvedana) の両方、唯識的立場からは自己認識を認めるということが常識となっている (桂 1969, 24–27; 1984, 108–112 など)。しかし、近年、このような認識結果理解に異を唱える研究も発表されている。例えば、従来、『プラマーナ・ヴァールティカ』(PV) III 341–352 では「経量部的立場でも自己認識が認識結果である」ことが説かれていると考えられてきたが、福田 (1988), 村上 (2008) などは、ゲルク派の学僧ケードゥプジェ (1385–1438) に基づいて、当該箇所においては唯識説における「対象認識」(もしくは「他者認識」(gzhan rig)) が説かれている、という解釈の可能性を提示している。福田 (1988, 10) は、ケードゥプジェが PV III 301–367 をどのように分節しているかを紹介し、彼の独自性を以下のように指摘している。

「この解釈の最大の特徴は、k. 320 以下がすべて唯識説である点、もっと限定するならば、先の戸崎博士の分節で外部世界実在論 (経量部説) に立つとされていた kk. 341–352 [原文 353]⁽¹⁾ (あるいは k. 338 を含めることもできよう) が、唯識説の他者認識の設定方式と解されている点である。」

なお、村上 (2008) は、このようなケードゥプジェのダルマキールティ理解がインド仏教論理学の文献に実際に適応可能かどうかを考察した上、「PV III 341–352 における議論が経量部思想を説くものであるとする従来の解釈には問題がある」と結論している⁽²⁾。

確かに、PV III 341–352 を唯識説と解釈する点でケードゥプジェには独自性があると言える。しかし、福田 (1988), 村上 (2008) が試みたように、ケードゥプジェの理解をそのままインドの伝統に当てはめることは可能であろうか。PV において、ダルマキールティ (ca. 600–660) は、経量部説においても自己認識が認識結果であるということを当該の PV III 341–352 以外のどこでも語っていない。従って、もしケードゥプジェの解釈が正しいとすれば、そもそもダルマキールティは経量部説における認識結果が自己認識であるということを全く語っていないことになってしまう。そしてそれは、ケードゥプジェ自身、経量部と唯識派双方に共通するものとして、自己認識を認識結果とする説を唱えている⁽³⁾ ことと矛盾するのではなかろうか。

実際のところ、この周辺のダルマキールティの議論は、インドの註釈者たちの間でも解釈が様々に分かれており、極めて難解な箇所である。ディグナーガ (ca. 480–540) の記述に遡っても、その記述だけから判断すれば、仏教論理学派は経量部的立場で、自己認識ではなく対象理解のみを認識結果として認めていると解釈することもあるいは可能であろう。

従って、本論文では、今一度、仏教論理学派が認識結果についてどのような議論を行っているか、その文脈を検討し直す。特に、これまでの研究で使用されていないプラジュニャーカラグプタ (ca. 750–810) の解釈を提示しつつ、PV III 341 に至るまでの PV III 339–340 の内容を明らかにする。

2 議論の概要

議論の詳細に入る前に、まず PV III 341–352 の概要を提示しておく。戸崎 (1985) はこの議論を次のように分析している。

外境実在論

a 外境対象は領納 (自証) に従って決知される (kk. 341–344)

b 結論—自証が量果である (k. 345)

c 量と量果

(1) 対象顕現性が量である (kk. 346–347abc)

(2) 「対象の認識」は自証を本質とする (kk. 347cd–348ab)

(3) 対象形相が量であり、自証が量果である (kk. 348cd–349ab)

(4) 量と量果は対象を異にしない (kk. 349cd–350a)

(5) 「自証」の勝義性と「対象の認識」の世俗性 (kk. 350bcd–352)

これ以前の箇所では、自己認識が認識結果であることが唯識の立場から語られている (kk. 320–337)。さらに「対象認識」とはどのようなものか、ということが経量部の立場から (k. 338)、さらに唯識の立場から (kk. 339–340) それぞれ語られている。それに続いて、問題の PV III 341 以下が導入されるのである。

筆者の理解を述べるならば、この PV III 341–352 で扱われている内容は、基本的に以下のように要約できると考えられる。すなわち、外界対象を認めるとしても、そのような外界対象はそれぞれの人が持つ直接経験に従って、好ましいもの、好ましくないものなどというように確定される。従って、唯識説と同じように、経量部説においても、自己認識こそが認識結果である。ただし、認識手段は、経量部説においては〈対象の顕現を持つこと〉、言い換えれば、認識内部に入り込んだ所取の相 (grāhyākāra) であって、唯識説において認識手段とされる能取の相 (grāhakākāra) ではない、と。

なお、当該箇所はディグナーガの『プラマーナ・サムツチャヤ (・ヴリッティ)』(PS(V)) I 9 に相当する。

svasaṃvittiḥ phalaṃ vātra (PS I 9a)

dvyābhāsaṃ hi jñānam utpadyate svābhāsaṃ viśayābhāsaṃ ca. tasyobhayābhāsasya yat
svasaṃvedanaṃ tat phalam. kiṃ kāraṇam.

tadrūpo hy arthaniścayaḥ / (PS I 9b)

yadā hi saviśayaṃ jñānam arthaḥ, tadā svasaṃvedanānurūpam arthaṃ pratipadyata iṣṭam aniṣṭam vā.
yadā tu bāhya evārthaḥ prameyaḥ, tadā

viśayābhāsataivāsya pramāṇam (PS I 9cd)

—認識結果としての自己認識—

tadā hi jñānasvasamvedyam api svarūpam anapekṣyārthābhāsataivāsyā pramāṇam. yasmāt so 'rthaḥ
tena mīyate // (PS I 9d)

yathā yathā hy arthākāro jñāne sanniviśate⁽⁴⁾ śubhāśubhāditvena, tattadrūpaḥ sa viśayaḥ pramīyate.
 (PSV, 4.3–14 ad PS I 9)

(A) 「あるいは、ここでは自己認識が〔認識〕結果である。」

というのも、認識は、自己としての顕現 (svābhāsa) と対象としての顕現 (viśayābhāsa) という二つの顕現を持って生じるからである。両方の顕現を持ったその〔認識〕にとって自己認識が〔認識〕結果である。何故か。

(B) 「何故なら、対象の確定 (arthaniścaya) がその〔自己認識〕を本質とするから。」

というのも、〔自身の中に〕対象を持つ認識が対象 (artha) であるときに、自己認識に即して対象を好ましいもの、もしくは好ましくないものとして、〔人は〕理解するからである。

(C) しかし、外界の対象物が認識対象 (prameya) であるとき、

「この〔認識〕が対象の顕現を持つこと (viśayābhāsatā) こそが認識手段 (pramāṇa) である。」

というのも、その場合、〔認識〕それ自体が認識〔自身〕によって自己認識されるべきものであっても、〔そのような自己認識されるべき認識それ自体を〕無視して、この〔認識〕が〈対象の顕現を持つこと〉(arthābhāsatā) こそが認識手段である。何故なら、その外界対象は、

「その〔対象の顕現を持つこと〕を通じて認識される〔から〕。」

というのも、あれこれのかたちで、すなわち、清浄なもの・清浄でないものなどとして、対象のすがた (arthākāra) が認識の中に入り込む (sanniviśate) とき、そのようなかたちで、その対象 (viśaya) が認識されるからである。

ジネーンドラブッディ (ca. 710–770) の解釈に従えば、(A) と (B) の箇所が経量部と唯識派に共通の見解を示したもので、(C) の箇所は経量部の見解を示したものと理解される。この解釈についても、様々な問題を抱えているが、ここでは置いておく⁽⁵⁾。

本論文では、PV III 341 以降の議論を直接取り扱わないが、便宜のため、PV III 341 のみ以下に挙げておく。

vidyamāne 'pi bāhye 'rthe yathānubhavam eva saḥ /
 niścītātmā svarūpeṇa nānekātmatvadoṣataḥ // (PV III 341)

外界対象が存在するとしても、その〔外界対象〕は、直接経験の通りにのみ〔決定され〕、〔外界対象〕そのものが、それ自体として決定されるのではない。何故なら、〔それぞれの人にとって共通であるはずの外界対象が〕様々なものであるという過失〔に陥ってしまう〕から。

3 唯識説における対象認識

ところで、一般的に、外界対象を容認しないことで唯識派は唯識派たり得ると考えられる。そのことを考慮した場合、ケドゥップジェが主張する「唯識説における対象認識」というもの

—認識結果としての自己認識—

自体、奇異な印象を与えるかもしれない。しかし、このような「唯識説における対象認識」という発想自体は、もともとダルマキールティ、さらにはディグナーガの記述に遡り得るものである。以下ではそのことを検討していく。

問題のPV III 341が始まる直前のPV III 339においてダルマキールティは次のように述べている。

yadā saviṣayaṃ jñānaṃ jñānāṃśe 'rthavyavasthiteḥ /
tadā ya ātmānubhavaḥ sa evārthaviniścayaḥ // (PV III 339)

認識の部分 (jñānāṃśa すなわち認識内部の所取の相) が [外界] 対象 (artha) として確立されるから、認識 (jñāna) は [自身の中に] 対象を持つ (saviṣaya)。その場合、[認識] それ自体の直接経験 (ātmānubhava)、それこそが対象の確定 (arthaviniścaya) である。

ここで言われている「対象の確定」とは、先に挙げたディグナーガのPS I 9bにおける「対象の確定」に対応するのは明らかである。また、それに対するPSVの記述から、それが「対象を好ましいもの、好ましくないものとして理解すること」であることが理解されよう。少し議論を外れるが、もともとインドの一般理解では、認識主体 (pramātr), 認識対象 (prameya), 認識手段 (pramāna), 認識結果 (pramiti) の四つは、人間の活動の問題と密接に関連して語られてきたことに付言しておく。例えば、『ニヤーヤ・バーシャ』(NBh)では次のように言われている。

tatra yasyepsājihāsāprayuktasya pravṛtīḥ sa pramātā, sa yenārthaṃ pramiṇoti tat pramāṇam, yo 'rthaḥ pramiyate tat prameyam, yad arthavijñānaṃ sā pramitiḥ. (NBh, 24.2-3)

それらのうち、認識主体とは、[対象を] 得よう、または捨てようという欲求と結びついて、活動を行う人のことである。認識手段とは、その人が対象を認識する手段である。認識対象とは、認識されるものである。認識結果とは、対象に関する認識のことである。

活動の対象に関して「これこれだ」という認識が起こってはじめて、人はその対象に向けてなんらかの活動を行う。上記引用箇所、ディグナーガやダルマキールティが述べている「対象の確定」も、このような人間の活動を前提として述べられていると思われる。そのように考えた場合、唯識説において外界世界が容認されないといっても、人間の活動そのものが否定される訳ではないから、唯識的立場から「対象の確定」を述べるとしても何ら不思議はない。夢の中でも人は活動を行うことができるのである。

ところで、プラジュニャーカラグプタは上述のPV III 339を次のように説明している。

yaḥ⁽⁶⁾ punar aparaṃ bāhyaṃ na kalpayati jñānāṃśa⁽⁷⁾ eva bāhyatayā tenāvasīyate. tadā ya evātmano jñānākārasya ānubhavas tatraiva⁽⁸⁾ vāsanāniyamād artha itī niścayaḥ. tadā niścayabalād arthasamvedanaṃ phalam itī vyavasthāpyate. tadā vijñānavāde 'py arthasamvedanaṃ phalam. (PVA, 392.9-11)

さらに、[認識とは] 別個な外界を構想しない者 [すなわち、唯識論者]、彼によっては、他ならぬ認識の部分が外界として判断される (avasīyate)。『その場合、[認識] それ自体の』、すなわち、認識の [内部にある] 形象 (jñānākāra) の『直接経験』、まさにそれに対して、潜在印象の限定に基づいて、『[[外界の] 対象である] という確定] が [起こる]⁽⁹⁾。その場合には、[認識に対する「外界の対象である」というその] 確定によって、「対象認識 (arthasamvedana) が [認識] 結果である」と確立される。その場合、唯識説において

も、対象認識が「認識」結果である。

この註釈の中で注目すべきは、下線を付したように、プラジュニャーカラグプタが「唯識説においても対象認識が「認識」結果である」と明言していることである。プラジュニャーカラグプタによれば、唯識説においても、「対象認識」が成立しない訳ではない。外界対象が存在せず、実際に認識しているものが認識の部分、すなわち認識内部の所取の相であるという場合であっても、潜在印象を通じて「今認識しているものは外界の対象である」という確定が起こり得るのである。

以上のようなプラジュニャーカラグプタの解釈に従えば、PV III 339 では唯識説においても対象認識が認識結果であることが説かれているということが理解される⁽¹⁰⁾。従って、ケドゥップジェが、プラジュニャーカラグプタと同様、PV III 339 を「唯識説における対象認識」が説かれているものと理解したと仮定しても何ら問題はない。

4 PV III 340 解釈

しかし、PV III 341 以降でも、ケドゥップジェのように「唯識説における対象認識」が語られていると考えることは可能であろうか。それを考える上で、その間に位置する PV III 340 で何が説かれているのか、解明する必要がある。

戸崎(1985, 24-25, fn. 83)は、この PV III 340 が唯識説に立った論述か、外界実在論に立った論述か、註釈者たちの間に見解の相違があると指摘し、デーヴェンドラブッディ (ca. 630-690)、シャーキャブッディ (ca. 660-720) の解釈を前者、プラジュニャーカラグプタ、ラヴィグプタ (ca. 780-840)、マノーラタナンディン (ca. 10th-13th c.) の解釈を後者のものとして理解している。以下それぞれの解釈を検討する。

ダルマキールティは PV III 340 で次のように述べている。

yadīṣṭākāra ātmāsyā⁽¹¹⁾ anyathā vānubhūyate /
iṣṭo 'niṣṭo 'pi vā tena bhavaty arthaḥ praveditaḥ // (PV III 340)

もしも、この「認識」それ自体が好ましい形相を持つものとして、あるいはそれ以外の仕方ですなわち、好ましくない形相を持つものとして直接経験されるならば、その「認識それ自体を直接経験すること」によって、対象が好ましいもの、あるいは好ましくないものとして知られたということになる。

これに対するデーヴェンドラブッディの説明は次の通りである。

ci'i phyir zhe na / 'di ltar gal te blo 'di bdag 'dod pa'i rnam pa'am rnam pa gzhan te / mi 'dod pa'i rnam par skyes bus myong 'gyur na / de'i tshe 'dod pa'am mi 'dod pa des kyang don rig pa ni 'gyur ba yin zhes bya bas ni rnam par rig pa tsam nyid kyi 'bras bu'i rtoḡ pa 'di bshad do // (PVP, D223b6-7; P262b3-4)

【そのように認識それ自体の直接経験が対象の確定であるのは】何故か。何故なら、『もしも、この』認識『それ自体が好ましい形相を持つものとして、あるいはそれ以外の仕方ですなわち、好ましくない形相を持つものとしてある人に『直接経験されるならば、それによって、対象が好ましいもの、あるいは好ましくないものとして知られたことになる』の

—認識結果としての自己認識—

だから。以上、唯識の立場の〔認識〕結果の解釈というこれが述べられた。

デーヴェンドラブッディはこの PV III 340 をそれに先行する PV III 339 の理由として理解している。すなわち、認識それ自体の直接経験が対象の確定であると考えられるのは、認識それ自体が好ましいものとして直接経験されたときに、対象がそのように好ましいものとして知られたことになるからである、と理解している。なお、デーヴェンドラブッディは、PV III 338 の後で、「外界対象が存在する場合の〔認識結果についての〕第二の解釈が述べられた」⁽¹²⁾ と言っているから、PV III 340 までで述べ終わったものとは、唯識説において対象認識が認識結果とみなされる解釈であろう⁽¹³⁾。いずれにせよ、デーヴェンドラブッディは、ここで一旦話題が変わると理解しているのは明らかである。

これに対して、プラジュニャーカラグプタは「外界の対象を承認する者たちにとっても、自己認識こそが〔認識〕結果である」⁽¹⁴⁾と述べた後に、その理由としてこの PV III 340 を挙げている。つまり、プラジュニャーカラグプタは、デーヴェンドラブッディとは違い、外界実在論者にとっても自己認識が結果であることを説明したものとして、PV III 340 を理解しているのである。彼はそのことを次のように説明している。

na hi saṃvedanasyānyathātve vastv anyatheti⁽¹⁵⁾ śakyam. tasmāt saṃvedanānusāreṇaivārthavyavasthites tadabhinnayogakṣematvād bāhyavedanaṃ svasaṃvedanam eva. tenopacārāt bāhyavedanam ucyate. (PVA, 392.17-18)

というのも、認識がある仕方である場合、対象がそれとは別の仕方である、ということはある得ないからである。従って、認識に従ってのみ対象が確立されるのだから、その〔認識〕と安危を共にするので、外界の認識は、自己認識に他ならない。従って、間接表現 (upacāra) によって〔自己認識が〕「外界の認識」と言われるのである。

ここでプラジュニャーカラグプタが述べているのは、外界実在論者が述べている「外界の認識」も、自己認識に他ならず、それは間接表現によってそのように「外界の認識」と述べられているに過ぎない、ということである。このような解釈は、外界実在論における対象認識と自己認識を同一視している点で、以下に挙げるマノーラタナンディンの記述と同じと言える。

bahirarthanaye 'pi buddhivedanasyaivārthavedanatvāt tathā yadīṣṭākāro 'syā buddher ātmā 'nubhūyate 'nyathāniṣṭākāro vā, tadā tena jñānaneṣṭo 'niṣṭo vārthaḥ pravedito bhavati, nānyathā. (PVV, 222.1-3)

外界対象を認める見解でも、知の認識 (buddhivedana) こそが対象の認識 (arthavedana) であるから、そのように、『もしも、この』認識『それ自体が好ましい形相を持つものとして、あるいはそれ以外の仕方、』すなわち、好ましくない形相を持つものとして『直接経験されるならば、その』認識『によって、対象が好ましいもの、あるいは好ましくないものとして知られたことになる』のであって、それ以外ではない。

デーヴェンドラブッディの解釈に従えば、PV III 340 は「外界を認めない唯識の立場でも、認識が直接経験されれば、それがすなわち対象が知られたことになる」というように PV III 339 の続きとして理解され、続く PV III 341 から話題が変わると理解される。他方、プラジュニャーカラグプタ、マノーラタナンディンの解釈に従えば、PV III 340 は「外界を認める実在論者の立場でも、認識が直接経験されてはじめて対象が知られたことになる」というように PV III 339

とは異なる話題を扱ったものとして理解され、PV III 341 へ続くものと理解される。

また、後者のうち、プラジュニャーカラグプタが「外界の認識」とは間接表現に過ぎないとみなしていることを考慮すれば、ここで、知られたことになると言われる「対象」とは実際には知られないものとしてプラジュニャーカラグプタも理解していることが分かる。そうであれば、外界対象が実在しようが、実在しまいが、あるのは自己認識のみであるとデーヴェンドラブッディ、プラジュニャーカラグプタはともに理解していると考えることができよう。

5 結語

プラジュニャーカラグプタの解釈に従った場合、「唯識説における対象認識」という発想自体は、ダルマキールティの PV III 339 にも認められると言える。従って、PV III 339 に関しては、ケドゥップジェの解釈は不自然ではないと言える。またこの点に関して、福田(1988)、村上(2008)が指摘する通り、仏教論理学派が唯識的立場で認識結果として自己認識のみを認めたとする従来の解釈には再考の余地がある。

仮にケドゥップジェが、プラジュニャーカラグプタと同様、PV III 339 を「唯識説における対象認識」が説かれていると理解し、そのつながりで、PV III 341 以降でも「唯識説における対象認識」が語られている、と考えたとすれば、その解釈もそれほど不自然なものとは言えない。しかし、デーヴェンドラブッディやプラジュニャーカラグプタ、マノーラタナンディンはそうは理解していない。デーヴェンドラブッディは、PV III 340 で議論が区切れるとし、PV III 341 から、経量部説における自己認識が語られると理解している。他方、プラジュニャーカラグプタ、マノーラタナンディンは、PV III 339 で議論が区切れるとし、PV III 340 から経量部説における自己認識が語られると理解している。

もし PV III 341 以降でも「唯識説における対象認識」が説かれているというケドゥップジェの解釈が正しいとすれば、冒頭で指摘したように、そもそも、経量部説において自己認識が認識結果であるということをダルマキールティはどこでも語っていないことになってしまおう。そして、それは経量部・唯識双方の立場から自己認識も認識結果とみなされ得るとするケドゥップジェ自らの発言と矛盾することになる。従って、PV III 341 以降を唯識説と考えるケドゥップジェのダルマキールティ理解には無理があると言える。

略号表

- M Manuscript B of PVA. *Sanskrit Manuscripts of Prajñākaragupta's Pramāṇavārttikabhāṣyam*. Ed. Shigeaki Watanabe. Patna-Narita: Bihar Research Society & Naritasan Institute for Buddhist Studies, 1998.
- NBh Vātsyāyana. *Nyāyabhāṣya*. In *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyāṭikā & Viśvanātha's Vṛtti*. Eds. Taranatha Nyaya-Tarkatirtha and Amerendramohan Tarkatirtha. Reprint of Calcutta Sanskrit Series Nos. 18 and 19, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd., 1985 (1st. ed. 1936–44).
- PV Dharmakīrti. *Pramāṇavārttika*. In *Pramāṇavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan)*. Ed. Yusho Miyasaka. *Acta Indologica* 2, pp. 1–206. 1971–72.

—認識結果としての自己認識—

- PVA Prajñākaragupta. *Pramāṇavārttikālaṃkāra*. In *Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārttikālaṃkāraḥ of Prajñākaragupta*. Ed. Rāhula Sāṅkrītyāyana. Tibetan Sanskrit Works Series 1. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1953.
- PVT Śākyabuddhi. *Pramāṇavārttikaṭīkā*. D 4220; P 5718.
- PVV Manorathanandin. *Pramāṇavārttikavṛtti*. In *Dharmakīrti's Pramāṇavārttika with a Commentary by Manorathanandin*. Ed. Rāhula Sāṅkrītyāyana. Appendix to *Journal of Bihar and Orissa Research Society (Patna)* 14–16. 1938–40.
- PS(V) Dignāga. *Pramāṇasamuccaya(-vṛtti)*. See Steinkellner 2005.
- PST Jinendrabuddhi. *Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā*. In *Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā, Chapter 1, Part I: Critical Edition*. Eds. E. Steinkellner, H. Krasser and H. Lasic. Beijing-Vienna: China Tibetology Publishing House & Austrian Academy of Sciences Press, 2005.
- R Ravigupta. *Pramāṇavārttikaṭīkā* ad PV III. D 4225; P 5722.
- RGT mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po. *rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rgya cher bshad pa rigs pa'i rgya mtsho las mngon sum le'u'i rnam bshad*. Zhol ed. Vol. Da.
- S Rāhula Sāṅkrītyāyana's edition of *Pramāṇavārttikālaṃkāra*. See PVA.
- T Tibetan translation of *Pramāṇavārttikālaṃkāra*: D 4221; P 5719.
- TS Śāntarakṣita. *Tattvasaṅgraha*. In *Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary Pañjikā of Shri Kamalashīla*. Ed. Swami Dwarikadas Shastri. 2 vols. Bauddha Bharati Series 1. Varanasi: Bauddha Bharati, 1968.
- TSP Kamalaśīla. *Tattvasaṅgrahapañjikā*. See TS.

文献表

池田 道浩

1993 「ケードゥブジェの量果の解釈について」『日本西藏学会々報』39, pp. 8–13。

桂 紹隆

1969 「ダルマキールティの自己認識の理論」『南都仏教』23, pp. 1–44。

1984 「ディグナーガの認識論と論理学」『講座大乘仏教9 認識論と論理学』平川彰・梶山雄一・高崎直道編, 春秋社, pp. 103–152。

戸崎 宏正

1974 「後期大乘仏教の認識論」『講座仏教思想2 認識論・論理学』長尾雅人・中村元監修, 理想社, pp. 145–186。

1985 『仏教認識論の研究』下巻, 大東出版社。

福田 洋一

1986 「形象虚偽論と『同時知覚の必然性論証』」『チベットの仏教と社会』山口瑞鳳監修, 春秋社, pp. 403–430。

1988 「ケードゥブジェの『プラマーナ・ヴァールティカ』注釈における自己認識と他者認識の設定方式について」『日本西藏学会々報』34, pp. 8–15。

村上 徳樹

2006a 「ケードゥブジェのPV III 338–340の解釈について」『印度学仏教学研究』54-2, pp. 9–12。

2006b 「所取の形象と能取の形象についてのケードゥブジェの解釈」『日本西藏学会々報』52, pp. 3–12。

2008 「rang rig pa に関するケードゥブジェの解釈」『日本西藏学会々報』54, pp. 17–31。

Hattori, Masaaki.

1968 *Dignāga, On Perception*. Harvard Oriental Series 47. Cambridge: Harvard University Press.

Steinkellner, Ernst.

2005 *Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter I*, www.oeaw.ac.at/ias/Mat/dignaga_PS_1.pdf.

注

- (1) 現在一般的に PV の底本とされている Miyasaka 本に PV III 342 としてあげられている詩頌は、PV のテキスト校訂者サーンクリッティヤーヤナがプラジュニャーカラグプタの詩頌を PV の詩頌と誤解したものである。従って、PV 知覚章に関しては、342 偈以降のナンバリングは戸崎 (1985) に従う方が正確である。詳しくは戸崎 (1985, 27, fn. 93) を参照されたい。
- (2) 福田 (1988, 9) もまた次のように述べている。「その常識的な解釈は、戸崎博士のように、ダルマキールティがこの箇所外部世界の实在を認めながら、それでも、本質考察をするならば、自己認識が認識結果であると認めなければならないと主張している、と読むことである。しかし、チベット人、少なくともゲールク派はそのように解していないし、ダルマキールティのコンテキストでも、必ずしもそのように解釈する必要はないように思われる。」
- (3) 福田 (1988, 9) を参照されたい。RGT, 118a2-3: ... dang po ni / gzung rnam gzhal bya / 'dzin rnam tshad ma / rang rig 'bras bu zhes bya ba tsam zhid mdo sems gnyi ga 'dod par khyad par med kyang / ...
- (4) pratibhāti を sannivīśate に訂正した。Steinkellner (2005) は、おそらく PVA から回収されるサンスクリット断片の pratibhāti という語を誤解した Hattori (1968, 105, n. 64) の解釈に従ったと考えられる。しかし、この pratibhāti という語は PST で jñāne という語に対応することからも明らかのように、現在分詞として理解されねばならない。See PST, 72.14-15: tatha hi yathā yathārthākāro jñāne sannivīśate śubhāśubhādirūpeṇa, tathā tathā svasaṃvittiḥ prathate; PVA, 393.29-30: yathā hy arthasyākāraḥ śubhādītvena pratibhāti nivīśate, tadrūpaḥ sa viśayaḥ* pratīyate (*sa viśayaḥ S, yul de T; sva viśayaḥ M.); TSP, 483.24-484.11: ... yathā yathā hy arthasyākāraḥ śubhrādītvena [śubhādītvena?] sannivīśate tadrūpaḥ sa viśayaḥ pramīyata ityādikam ācāryīyaṃ vacanaṃ ... Cf. PV III 349ab: yathā nivīśate so 'rtho yataḥ sā prathate tathā /
- (5) 認識結果をめぐる PSV の議論 (PSV 3, 21- 4, 10 ad PS I 8cd-9) と PV の議論 (PV III 301-352) がどのように対応しているかについてのインドでの解釈、およびチベットでの解釈については、池田 (1993) を参照されたい。
- (6) yaḥ S, M; gang gi tshe (*yadā) T.
- (7) jñānāṃśa M, shes pa'i cha T; jñānāṅga S.
- (8) tatraiva M, de nyid la T; tathaiva S.
- (9) このプラジュニャーカラグプタの説明では、PV に見られる「対象の確定」という語は、「『対象である』という確定」(artha iti niścayaḥ) と解釈されている。そして、そういった確定の対象として、「認識それ自体の直接経験」(ātmanubhava) が挙げられている。しかし、サンスクリットとしてダルマキールティの偈における関係代名詞構文をそのように読むことは不可能であり、「認識それ自体の直接経験」をそのような「対象の確定」そのものとするサンスクリットの素直な読みを採用しても何ら問題はなからう。
- (10) 戸崎 (1985, 23, fn. 80) も指摘する通り、プラジュニャーカラグプタの直弟子と考えられているラヴィグプタ、および、より後代の PV 註釈者マノーラタナンディンも、PV III 339 を「唯識説においても対象認識が認識結果である」という見解が説かれるものとして理解している。See R, D126a5-6; P152a2-3: yang na rnam par shes par smra bas gzhal bya rig pa nyid 'bras bu yin no zhes bstan pa'i phyir / shes pa'i cha don rnam 'jog phyir // gang tshe yul dang bcas shes pa // de tshe bdag nyid myong ba gang // de nyid don du rnam par nges // (PV III 339) zhes bya ba smos te; PVV, 221.16: tatas ca vijñānavāde 'py arthākāraḥ pramāṇam arthasaṃvit phalam aviruddham.
- (11) 'di bdag (*ātmāsyā) T; ātmā syād S, M. 戸崎 (1985, 25, fn. 85) も参照されたい。但し、写本を ātmāsmād と読む可能性も否定できない。

—認識結果としての自己認識—

- (12) PVP, D223b4; P262a8-b1: de ni don dang 'dra ba ni tshad ma yin zhing / don myong ba ni 'bras bu yin pa de ltar na / phyi rol gyi don yod pa'i rnam par rtog pa gnyis pa bshad pa yin no //
- (13) 池田 (1993, 9) は、デーヴェーンドラブッディによる分節理解を検討しているが、この唯識説において対象認識が結果とみなされる解釈に触れていない。なお、シャーキャブッディはこの唯識説における認識結果の解釈をPV III 337までで述べられたものと同じであるとしている。PVT, D220b7; P272b4-5: rnam par rig pa tsam nyid kyi sngar bshad pa'i 'bras bu rnam par rtog pa las 'di 'bras bu rnam par rtog pa gzhan yin no zhes blta bar mi bya ste / de nyid 'dis bstan pa'i phyir ro // (「唯識の立場で先に述べられた〔認識〕結果の解釈 (PV III 320-337) とこの〔認識〕結果の解釈 (PV III 339-340) は異なるとみなされるべきではない。何故なら、その同じことがこれによって述べられているのだから」)
- (14) PVA, 392.13-14: api ca, bāhyam artham abhyupagacchatām api svasamvedanam eva phalam. yataḥ (gzhan yang phyi'i don khas blangs kyang rang rig pa nyid 'bras bu yin no // 'di ltar /) Cf. R, D126b1; P152a6: gzhan yang phyi rol gyi don du smra bas kyang rang rig pa nyid 'bras bur khas blang bar bya ste / 'di ltar /
- (15) M, T; ins. vaktum S.

謝 辞

本研究は平成20年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。なお論文を執筆するにあたり、村上徳樹博士より数多くの資料をご提供頂いた。ここに記して謝す。